

総 説

横痃とリンパ節

松熊 晋

防医大誌 (2021) 46 (1) : 1 - 5

要旨：ここ数百年来使用されてきた西洋医学用語に対する邦訳語には、「神経」のように現在も違和感なく使用されるものと、「横痃」「下疳」のように聞き慣れなくなったものがある。また、名称が変更になったものもあり、たとえば、「リンパ腺」は、当初想定された腺機能がないことから、「リンパ節」へと変更になった。しかしながら、腺ペストや腺熱の「腺」は、実は、リンパ節病変を指している。本総説では、横痃 (bubo)、腺とリンパ節、下疳など、聞き慣れなくなった医学用語の幾つかについて概説する。

索引用語： 腺 / 腺熱 / リンパ節 / リンパ節炎 / 横痃
 / 腺ペスト / ホジキンリンパ腫 / 梅毒 / bubo /
 chancre

緒 言

ここ数百年来、西洋医学用語の邦訳として使用されてきたものには漢語由来が多く、「神経」のように今も色褪せず使用し続けられているものと、「横痃」「下疳」のように聞き慣れなくなったものがある。睪臓の「睪」、唾液腺や耳下腺の「腺」も、「神経」と同じように違和感なく使い続けられているが、これらは漢字ではなく、宇田川玄真が「にくづき(月)」に「萃」、 「泉」を組み合わせて創作した「国字」である¹⁾。時々、リンパ腺、扁桃腺という用語を聞くが、物質を産生、分泌する腺機能がないことから、現在はリンパ節、扁桃と称される²⁾。しかし、今も使用される腺ペスト^{3,4)}の「腺」は、実は、リンパ節病変を指す。腺はglandの邦訳だが、腺ペストの腺はbubonic (buboの形容詞形) の邦訳である³⁻⁵⁾。この「bubo」とは何であろうか。ここでは、知っておくべきながら、聞き慣れない上に覚えにくい医学用語の幾つかについて概説する。

1. buboと横痃

buboとはリンパ節腫脹を意味する³⁻⁶⁾。腋窩

や頸部のリンパ節腫脹を指すこともあるが、buboの語源がギリシャ語の鼠径部ということもあり、特に鼠径リンパ節腫脹について使用されることが多い^{5,7)}。鼠径リンパ節腫脹=buboは、横痃(おうげん)と邦訳され、よこね(横根)、便毒ともいう^{4,5,7)}。横痃を呈する疾患は、梅毒、軟性下疳、淋疾、鼠径リンパ肉芽腫、ペスト、野兎病等であり、見ただけで敬遠したくなるまれな病名が並ぶが、性病関連が多い³⁻⁶⁾。無痛性横痃bubo indolensは梅毒由来、有痛性横痃bubo dolensあるいは毒性横痃virulent buboはデユクレイ菌感染症の軟性下疳由来、熱帯性横痃tropic bubo又は気候性横痃climatic buboはクラミジア(Chlamydia)感染症の鼠径リンパ肉芽腫由来、悪性横痃malignant buboはペスト由来(腺ペスト)を指す⁴⁻⁶⁾。下肢外傷や足白癬の二次感染で鼠径リンパ節腫脹を来した時は、単純性横痃bubo simplexという⁴⁾。鼠径肉芽腫は鼠径リンパ肉芽腫とは別の感染症で、最初は鼠径リンパ節腫脹を呈さないが、最終的に腫大をきたし、pseudobubo(偽bubo)と称される⁹⁾。

buboはリンパ節の化膿性癒合塊とも記載さ

れ⁵⁾、確かに、腺ペスト、軟性下疳、鼠径リンパ肉芽腫、野兎病では、好中球集簇が目立つ化膿性リンパ節病変を形成する⁹⁾。腫大鼠径リンパ節 (bubo) において、好中球集簇とともに類上皮細胞が集簇した肉芽腫から成る化膿性肉芽腫 (suppurative granuloma) を認めるのは、鼠径リンパ肉芽腫と野兎病であり、組織像のみからは、猫ひっかき病と鑑別がつかない^{3,6,9)}。淋疾によるbubo、鼠径肉芽腫の終末像としてのpseudobuboでも、化膿性炎症と肉芽腫をみるという⁹⁾。腺ペストのbuboでは、高度な化膿性炎症をみるが、肉芽腫形成は明らかでなく^{3,6,9)}、ペスト起炎菌の*Yersinia pestis*と同じ*Yersinia*属である*Y. enterocolia*, *Y. pseudotuberculosis*が回盲部にリンパ節腫脹を起こした場合、化膿性肉芽腫を形成するのは対称的である^{3,9)}。軟性下疳のbuboも化膿性炎症は目立つが、肉芽腫形成は呈さない^{6,9)}。第1期、2期梅毒のbuboでは、化膿性炎症は目立たず、リンパ濾胞過形成、濾胞間質細胞集簇、肉芽腫形成が主体である^{6,9)}。

ペストおよび野兎病は、生物剤として使用される可能性が高く^{8,10)}、Manual of Clinical Microbiology¹¹⁾にも、ペスト菌は第二次世界大戦前後に米国、日本、旧ソ連で生物兵器化されたと明記されている。

2. 腺とリンパ節

緒言で記載したが、リンパ節を「腺」とした時代がある。後にホジキンリンパ腫と命名されることになる病気を発表した19世紀の英国医師Hodgkin T.の論文表題は、「On some morbid appearances of the absorbent glands and spleen」¹²⁾で、このglandsはリンパ節を指している。腺を意味するギリシャ語幹としてaden-があり⁵⁾、今もadenoma (腺腫)、adenocarcinoma (腺癌)の診断名で頻用されるが、リンパ節炎lymphadenitis、リンパ節腫脹lymphadenopathyの下線部もリンパ節を「腺」とした時代の名残と考えられる。ホジキンリンパ腫の別名も、かつてはlymphadenomaであった^{5,13)}。

「腺熱」(せんねつ)は、19世紀頃から発熱と頸部リンパ節腫脹を示す疾患として報告されてきたDrüsenfieber又はglandular feverの邦

訳^{4,14)}であり、この「腺」も腺ペストと同様、リンパ節病変を意味する。末梢血に大型異型リンパ球が出現することから、伝染性単核球症と呼ばれ、現在、そのほとんどがEpstein-Barr (E-B) ウイルス感染症に集約されてきた^{3,6)}。日本各地にも類似した鏡熱(熊本県)、日向熱(宮崎県)、徳島熱(徳島県)、土佐熱(高知県)等と呼ばれる風土病があり、これらも伝染性単核球症とされた時期もあるが、日本人研究者たちによってE-Bウイルスとは異なる同一病原体が分離されて*Rickettsia sennetsu*と命名、病名は腺熱リケッチア(sennetsu rickettsiosis)と名付けられた^{4,15)}。この学名は、邦訳の読みが英語(ラテン語)へ逆輸出された例(glandular fever → せんねつ → sennetsu)である。その後、病原体名は、*Ehlichia sennetsu*に変更になり、今では*Neorickettsia sennetsu*となった¹⁶⁾。Neorickettsiaは単球に感染する病原体で、最新版Manual of Clinical Microbiology¹⁶⁾では、その病名は「sennetsu fever」と記載されている。

なお、「泉熱」を「せんねつ」と誤読する医師もいるが、これは「いずみねつ」と読み、腺熱とは異なる疾患である。*Y. pseudotuberculosis*によって起こる子供、若年者の全身感染症で^{3,4)}、Scarlet-like fever⁸⁾、異型猩紅熱⁴⁾ともいう。発熱と腹痛が主訴で、クローン病や虫垂炎と誤診されること、結節性紅斑や若年性関節リウマチを呈することが知られ^{3,11)}、川崎病の診断基準を満たすこともある³⁾。泉は、発見者の泉仙助(金沢大学小児科初代教授)由来である^{4,17)}。scarletの「赤色」に当てられた漢語が「猩紅」⁵⁾だが、中国で「猩々(しょうじょう)」は身体が猿、真っ赤な人顔の架空動物を指し、酒好きとされ、オランウータンも「猩々」というらしい³⁾。日本の「猩々」も赤い能装束で踊る大酒家を指すことがある。遺伝研究に用いられてきたショウジョウバエは、酒好きでビール工場等で大量発生することがあり、ショウジョウと名前をつけられたという³⁾。

3. 下疳

下疳は「げかん」と読み、硬性下疳と軟性下疳がある。梅毒の第1期にみる陰茎のびらん～潰瘍を呈した無痛性の軟骨様硬結が「硬性下

瘡」で, chancreの邦訳だが, hard chancreともいう^{3-6, 18)}。硬性下疳は, 女性では子宮頸部か陰唇, homosexual menでは直腸や肛門管, 口腔内にでき, 陰茎病変と比較し気づき難い¹⁸⁾。chancreは, チャンクレではなく「シヤンカー」と発音するらしく, cancerからの派生である⁵⁾。

chancroidという病名があり, chancre類似性病変という意味とも思われるが, 類下疳ではなく, 「軟性下疳」と邦訳されている²⁻⁶⁾。chancroidは*Haemophilus ducreyi* (デユクレイ菌) 感染症で, 陰茎(男性), 膣内・尿道周囲(女性)の不整形で境界明瞭な潰瘍を形成し, 硬性下疳と異なり痛みが強く硬結がなく, soft chancre, soft soreともいい^{3-6, 19)}, これが邦訳の「軟性」に反映されている。軟性下疳は潜伏期が短く(4~7日), 病巣からの浸出物にデユクレイ菌が多く存在し, その自家接触で多発病巣を形成しやすい。約半数は鼠径リンパ節に波及して痛みが強い腫脹をきたし, それが有痛性横痃と呼ばれるゆえんである^{3, 6, 7, 19)}。梅毒トレポネーマとデユクレイ菌の両方の感染を伴ったものがあり, 混合下疳といわれる⁴⁾。

下疳の鑑別には, 第2期梅毒の扁平コンジローマ, ヘルペス, 鼠径肉芽腫, 陰茎アモーバ症, 扁平上皮癌が含まれる^{6, 18, 20)}。扁平コンジローマ, 鼠径肉芽腫では, 重層扁平上皮の過形成性変化が強く, 時に扁平上皮癌と見間違ふことがある⁶⁾。

4. 鼠径リンパ肉芽腫と鼠径肉芽腫

鼠径リンパ肉芽腫と鼠径肉芽腫は類似した名称だが, 全く別病変である。鼠径リンパ肉芽腫はlymphogranuloma venereum, 鼠径肉芽腫はgranuloma inguinaleの邦訳だが, 前者がlymphogranuloma inguinale, 逆に後者がgranuloma venereumと称されることもあり^{3-6, 20, 21)}, 欧米語としても酷似し混乱しやすい。そのためか, 欧米の教科書では, 鼠径リンパ肉芽腫は略号のLGV, 鼠径肉芽腫は組織特徴からDonovanosisとも記される^{6, 20, 21)}。ここに出てくるvenereumは, Venusすなわち性愛・美の女神「ヴィーナス」からの派生語で, 性病の意である。よって, 鼠径リンパ肉芽腫は, 性病性リンパ肉芽腫と表記する場合もあり⁴⁾, また, 梅毒, 淋疾, 軟性

下疳に次ぐ性病という意味で, 「第四性病」とも称される^{3, 4)}。

簡潔に違いを言えば, 鼠径リンパ肉芽腫は皮膚病変が乏しく, 鼠径リンパ節腫脹(bubo)が主体の病変であり, 対する鼠径肉芽腫は陰部皮膚のびらん性結節が主体で, 鼠径リンパ節腫脹は最終的に出ることはあってもそれは主体ではない^{3, 6, 20, 21)}。鼠径リンパ肉芽腫は, 血清型L1, L2, L3型の*Chlamydia trachomatis*の感染症で, 感染後数日~2週後に無痛性水疱か丘疹が形成されるが, すぐに治癒して気づかれないことが多く, その1~2週後に有痛性buboが現れ, これが主訴になることが多い^{3, 6, 21)}。一方, 鼠径肉芽腫では, 感染後1~4週, 時には1年経過してびらんを伴った無痛性結節が陰茎等に起こる。結節周囲に偽上皮腫性過形成像が認められ, びらん面の滲出液中あるいは肉芽組織内には, 特徴的な細胞質内封入体を有する組織球が存在し, Donovan小体と呼ばれる^{3, 6, 20)}。Donovan小体内に存在するグラム陰性桿菌が鼠径肉芽腫の起炎菌で, カリマトバクテリウム(*Calymmatobacterium granulomatis*)と呼ばれてきた^{3, 20)}が, 今は*Klebsiella granulomatis*という^{6, 22)}。

5. 人名が付された学名と変遷

鼠径肉芽腫に出現するDonovan小体は, アイルランド人医師Donovan C.の発見にちなむ命名である⁵⁾。同じDonovanにちなむLeishman-Donovan小体がある³⁾が, これは内臓リーシュマニアに見られるもので, 鼠径肉芽腫とは無関係である。スコットランドの病理学者で軍医だったLeishman W.B.は, カラアザール患者から発見した病原体をトリパノソーマと考えたが, Donovanは別患者からみつけた病原体をquinine抵抗性のマラリアとして報告し, 論争になった^{23, 24)}。結局, Ross R. (1902年にマラリアでノーベル賞を受賞)が, その病原体をリーシュマニア属と判定, 両者は公平に処遇され, 構造物はLeishman-Donovan小体, 病原体は*Leishmania donovani*と命名された^{23, 24)}。カラアザールkala-azarは, 現在, 内臓リーシュマニアと同義語で, 巨脾とともに皮膚の色素沈着が有名である。ヒンドゥー語でkalaはblack, azarは

poisonの意なので、カラアザールは「黒熱病」あるいは「黒疫病」とでも訳せるかもしれない。ペストが「黒死病」と呼ばれたことに類似し、感染症で死に至る際の皮膚黒色化なのかもしれない（私的体験）。

ペスト菌の学名は*Yersinia pestis*だが、1960年代までは、*Pasteurella pestis*と呼ばれていた。*Yersinia*への学名変更は、発見者のYersin A. (エルザンあるいはイエルサン)にちなむが、実は、Yersinの発見よりも先に北里柴三郎がペスト菌を発見していた事実がある^{3, 25)}。北里は、当初、ペスト菌をグラム陽性と発表しており、この誤りを声高に批判した日本人研究者がいたことが、北里の命名につながらなかったと解釈する人もいる³⁾。北里といえば、本来、第1回ノーベル賞も受賞できたはずだったとの説があり²⁶⁾、不運な科学者だった印象がある。北里やビタミンB1相当物質を最初に発見した鈴木梅太郎博士の栄冠を邪魔しようとした人たちがいるようで^{3, 25, 26)}、小説ネタが多くつまった歴史がそこにあるようにも思われる。

ここに挙げてきた微生物の学名変更も、「リンパ腺」から「リンパ節」への変更に類似した医学用語の変遷とも解釈でき、そこには、生物としての系統樹の違い、生化学的性状の違い等々、様々な要因がある。梅毒起炎菌は、当初*Spirochaeta pallidum*とされたが、回転らせん体は同じだがやや異なるという意味を込めて、回転 (in turn) を意味するギリシャ語のTrepo-を使い*Treponema pallidum*に変更したものと思われる。近年の代表的な変更を次に挙げるので参考にされたい：1) 偽膜性腸炎の起炎菌となる*Clostridium difficile* → *Clostridioides difficile* (2016年変更)；2) 瘰癧 (ごそう) = にきびの起炎菌^{4, 5)} となる*Propionibacterium acnes* → *Cutibacterium acnes* (2016年変更)；3) 院内感染、日和見感染の起炎菌となる*Enterobacter aerogenes* → *Klebsiella aerogenes* (2017年変更)；4) 低温殺菌処理をしていない乳製品から腸結核、腹膜結核を起こすウシ型結核菌の*Mycobacterium bovis* → *Mycobacterium tuberculosis var. bovis* (2018年変更)。

6. 終わりに

「横痃」「横根」は、1603年刊行の日葡辞典に記載され⁸⁾、かなり昔から使用された漢語と考えられる。「神経」は、杉田玄白たちが解体新書を執筆する際、漢語の神氣と経脈とから造語したものである¹⁾。宇田川玄真は、杉田玄白の娘と結婚し、玄白の養子だったが、放蕩生活で離婚させられた経緯がある²⁷⁾。その後、玄真は宇田川家に養子に入り、次々とオランダ語の最新書を翻訳し、その中で、「腺」や「腓」の国字を創作しつつ、解体新書と並ぶ和蘭内景医範提綱を刊行し、日本中の医学者たちから絶賛されたという^{1, 27)}。昔の過ちをその後の努力、実践によって正した生き方であり、人生は、失敗だけで終わるわけではないと、勇気をくれる事例でもある。

難読で、聞き慣れず、かつ、覚えにくい医学用語等について、本総説が記憶に残るきっかけに少しでも役立てば、幸いと考えている。

結 語

横痃、腺、下疳等に関する医学情報を概説した。

利益相反

本総説に関連する利益相反なし。

文 献

- 1) 小川鼎三：医学の歴史。中公新書，東京，1964。
- 2) 山本九龍夫：健康の視点（その21）。So You. 341: 56-57, 2017。
- 3) 堤寛：感染症病理アトラス。文光堂，東京，2000，pp 38-41, 59-63, 73-75, 92-101, 190-193, 306。
- 4) 南山堂医学大事典，第19版。南山堂，東京，2006。
- 5) ステッドマン医学大事典，改訂第6版 [英和・和英]。メジカルビュー社，東京，2009。
- 6) McAdam AJ, Milner DA, and Sharpe AH.: Infectious diseases. In: Robbins and Cotran Pathologic Basis of Disease, 9th ed. Ed. by Kumar V, Abbas AK, and Aster JC, Elsevier/Saunders, Philadelphia, P.A., 2015, pp 341-402。
- 7) Tennant: Bubo: The different kinds and the differential diagnosis of the same. *J. Nati. Med. Assoc.* 8: 144-146, 1916。
- 8) 新村出 (編)：広辞苑，第二版補訂版。岩波書店，東京，1976。
- 9) O'Malley DP, George TI, Orazi A, et al.: Benign and Reactive Conditions of Lymph Node. In: Atlas of Nontumor Pathology, first series, fascicle 7. Ed. by King DW, American Registry of Pathology,

- Washington, D.C., 2009, pp 229-281, 283-326.
- 10) 防衛医学編纂委員会編: 防衛医学. 防衛医学振興会, 所沢, 2007, pp 656-672.
 - 11) Kingry LC, Tarr CL, and Petersen JM.: Yersinia. In: Manual of Clinical Microbiology, 12th ed. Ed. by Carroll KC, Pfaller MA, Landry ML, et al. American Society for Microbiology, Washington., D.C., 2019, pp 751-764.
 - 12) Hodgkin: On some morbid appearances of the absorbent glands and spleen. *Med. Chir. Trans.* 17: 68-114, 1832.
 - 13) Aikman J.: Lymphadenoma, or Hodgkin's Disease. *Glasgow Med. J.* 9: 383-393, 1877.
 - 14) Thornton B.: A case of glandular fever associated with erythema nodosum. *Br. Med. J.* 14: 902, 1900.
 - 15) 大道八六, 井上邦夫, 小林 譲, 他: 広島地方の腺熱について. 日本傳染病學會雜誌 37巻: 1-7, 1963.
 - 16) Pritt BS, and Dumler JS.: Ehrlichia, Anaplasma, and related intracellular bacteria. In: Manual of Clinical Microbiology, 12th ed. Ed. by Carroll KC, Pfaller MA, Landry ML, et al. American Society for Microbiology, Washington, D.C., 2019, pp 1163-1179.
 - 17) 谷内江昭宏: 泉熱再考. 病原体と免疫応答. 小児感染免疫 29: 369-381, 2018.
 - 18) Lukehart SA.: Syphilis. In: Harrison's Principles of Internal Medicine, 16th ed. Ed. by Kasper DL, Braunwald E, Fauci AS, et al. McGraw-Hill, New York, NY, 2005, pp 977-985.
 - 19) Gonzalez MD, and Ledebner NA.: Haemophilus. In: Manual of Clinical Microbiology, 12th ed. Ed. by Carroll KC, Pfaller MA, Landry ML, et al. American Society for Microbiology, Washington, D.C., 2019, pp 670-687.
 - 20) Hart, G.: Donovanosis. In: Harrison's Principles of Internal Medicine, 16th ed. Ed. by Kasper DL, Braunwald E, Fauci AS, et al. McGraw-Hill, New York, NY, 2005, pp 932-934.
 - 21) Stamm WE.: Chlamydial infections. In: Harrison's Principles of Internal Medicine, 16th ed. Ed. by Kasper DL, Braunwald E, Fauci AS, et al. McGraw-Hill, New York, NY, 2005, pp 1011-1019.
 - 22) Forsythe SJ, Pitout J, Charnot-Katsikas A, et al.: Klebsiella and selected Enterobacterales. In: Manual of Clinical Microbiology, 12th ed. Ed. by Carroll KC, Pfaller MA, Landry ML, et al. American Society for Microbiology, Washington, D.C., 2019, p 728
 - 23) Charles Donovan – Wikipedia. en.wikipedia.org > wiki > Charles_Donovan (参照2020-4-30)
 - 24) William Book Leishman – Wikipedia. en.wikipedia.org > wiki > William_Boog_Leishman. (参照2020-4-30)
 - 25) 医療の挑戦者たち (35) ペスト菌の発見④ (北里柴三郎) - テルモ. www.terumo.co.jp > challengers > challengers. (参照2020-5-12)
 - 26) 馬場錬成: ノーベル賞の100年. 自然科学三賞でたどる科学史. 中公新書, 東京, 2002.
 - 27) 宇田川玄真 – Wikipedia. ja.sikipedia.org > wiki > 宇田川玄真 (参照2020-4-30)

“Oh-gen” (bubo) and lymph nodes

Susumu MATSUKUMA

J. Natl. Def. Med. Coll. (2021) 46 (1) : 1 – 5

Abstract: The Japanese equivalents for Latin or European medical terms that have been used in Japan for hundreds of years include commonly used terms, such as “*Shin-kei*” (neurons), and those that are less familiar, such as “*Oh-gen*” (inguinal lymphadenopathy or bubo) and “*Ge-kan*” (chancre). Some Japanese medical terms have been updated to reflect changes in knowledge. For example, “*Rin-pa-sen*” was based on a supposed glandular function, but was recently updated to “*Rin-pa-setsu*” to reference a lack of glandular involvement. The Japanese word “*Sen*” within “*Sen-pe-su-to*” (bubonic plague) and “*Sen-netsu*” (glandular fever) indicates lymph node lesions. This review article summarizes medical information for several less familiar Japanese medical terms, including “*Oh-gen*” (bubo), “*Senn*” (lymph nodes/glands), and “*Ge-kan*” (chancre).

Key words: gland / glandular fever / lymph node /
 lymphadenitis / bubonic plague / Hodgkin lymphoma / syphilis
 / bubo / chancre